

## 播磨の古代寺院と造寺・知識集団 8

賀毛の古代寺院 3  
一加古川中流域の古代寺院を歩く

寺岡 洋

## 椅鹿(はじか)廃寺(加東市東条町)

賀毛の古代寺院紹介の3回目になります。今まで紹介した寺院は、殿原(とのはら)廃寺、吸谷(すいたに)廃寺、繁昌(はんじょう)廃寺、野条廃寺の4ヶ所。現在の行政区画ではすべて加西市域に所在し、賀毛の地では西に位置する。今回紹介する椅鹿廃寺は賀毛でも東に偏した加東市東条町になる。

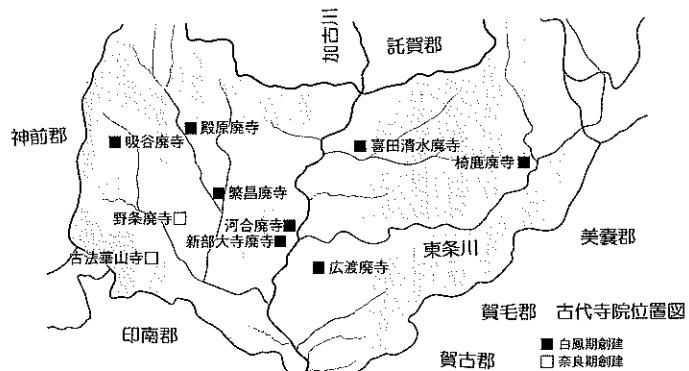
東条町は加古川の支流である東条川上流になり、神戸市北部や三田市に近い。旧東条町役場から県道17号線(西脇三田線)を東へ15kmばかり走ると、有馬郡衙(ぐんか)推定地の宅原(えいばら)遺跡が所在する。古代においても北播磨と摂津を結ぶ交通路があったと思われる(寺岡「有馬郡幡多(はた)郷を歩く」『むくげ通信』205 2004年)。

椅鹿廃寺は、中国自動車道ひょうご東条IC下車。県道17号線を約2km西へ、天神北交差点を右折(北)、600mくらい。商店街を抜けたあたりの左手(西側)の丘陵にあるが分かりにくい。山の上に今も立派な椅鹿寺があるが、そちらではない。

椅鹿廃寺については1954年、民俗学で著名な赤松啓介氏による概要報告がある(「椅鹿の廃寺址」『古代聚落の形成と発展過程』明石書店 1990年)。そして近年、圃場整備にともない範囲確認調査が行われた(「椅鹿廃寺」「椅鹿谷瓦窯」「埋蔵文化財調査年報—2001・2002年度—」加東郡教育委員会 2003・2004年)。

周辺景観は圃場整備により一変したそうだが、椅鹿谷が一望できる位置である。稲藁を焼く煙が靄のようにたなびいていた。小さな薬師堂の傍らには凝灰岩製の塔心礎が置かれ、礎石も周辺と堂の礎石に転用され残る。薬師堂内には平安後期の薬師如来坐像が安置されている由。薬師堂横には木製の破損仏が並べられており、室町末期の板碑もある。

調査はトレンチ(試掘溝)によるもので詳細は明らかでないが、寺域は溝によって区切られた一辺7mの方形と想定されている。伽藍配置は図のよう



に法隆寺様式に類似するが、伽藍が寺域中軸線の西側に片寄る。各建物の規模は、推定金堂が東西約13.5m×南北約12.5m、講堂が東西約24m×南北約15m、塔の規模については記載がない。

寺域の西40mの斜面に椅鹿廃寺の瓦を焼いた2基の椅鹿谷瓦窯が調査されているが、埋め戻されており確認できない。

瓦類は軒丸瓦が3タイプ、軒平瓦が4タイプ出土している。単弁八葉蓮華文軒丸瓦は近接する喜田清水廃寺・遺跡(社町)に似るとの指摘がある。また、垂木先(たるきさき)瓦は胎土から南山城からもたらされた可能性があると報告されており、注目される。椅鹿谷を南北に抜ける県道75号線は篠山(丹波国氷上郡)に通じ、古代山陰道とつながる。

平瓦、丸瓦の詳細は未報告だが、朱の付いた平瓦がある。円面鏡、鉄鉢なども出土している。

椅鹿廃寺は奈良時代に創建され鎌倉時代頃に廃絶したものと推定されている。その後も信仰の場として小堂が幾度か建立され、現在に続く。寺院建立前に建物があったことも推定されている。

## 寺院の造立集団・知識リスト

『播磨國風土記』端鹿里(はしかのさと)には神(住吉大神か)サマ以外に登場人物はない。

正倉院文書では、「優婆塞(うばそく)貢進文」に

委文連並国(しどりのむらじなみくに) 年廿一

播磨國賀茂郡橋鹿郷戸主 委文連麻呂 戸口がみられる。委文連氏は「連」という姓(かばね)をもち、在地の有力者であろう。優婆塞は在俗の修行者で、造東大寺司への出仕後、正式の僧になり帰郷したと考えられ、知識の有力候補者である。

木簡では、平城宮東院地区で出土した

□国廣山 播磨國賀茂郡椅鹿郷 錢一貫  
という人物がいる(口は不詳)。

椅鹿廃寺の最大のスポンサー・壇越(だんおつ)と

しては、住吉神社の椅鹿山領・端鹿杣（はしかのそま）を管掌した船木連（ふなきのむらい）氏が有力候補。杣は寺院や宮殿の建築のための木材産地で、東大寺領・伊賀板蠅杣（いたばえのそま）がよく知られる。

平安前期頃に作成されたと推定される『住吉神社神代記』では、篠山・三田から北播磨に及ぶ広大な地を社領と主張している。古代の行政区画では、賀茂郡の東半、美嚢（みなき）郡の全域、有馬郡の西端、丹波国多紀（たき）郡の西南部に相当する。

この地域を歩くと多くの住吉神社やその祭神を祭る神社が残り、杣山の名残とも考えられる。『小野市史』第一巻（小野市 2001年）によれば、6ヶ所挙げられている。よく似た現象に、赤穂郡の秦氏に関連する大避（おおさけ）神社がある。

『住吉神社神代記』には登場しないが、山直（やまのあたえ）氏も播磨の地誌として知られる『峰相記（みねあいき）』（南北朝時代初期に成立）では住吉神社、住吉神を祭る佐保神社と密接につながっており、北播磨の知識寺院の有力な壇越候補である。

また、端鹿郷周辺には造東大寺司が管理する「播磨山作所」が設けられ、「大仏殿大柱」が調達された可能性が高いと指摘されている（『加西市史』第一巻 2008年 p.237～240）。そうであれば、造東大寺司の施設があったであろう。

#### 喜田（きた）清水廃寺・遺跡（加東市社町）

椅鹿廃寺からほぼ中国自動車道と沿う県道17号線を西へ約10km。中国自動車道・滝野社ICの東隣。三草（みくさ）川を渡り、梶原交差点を右折（北）し、区画整理された宅地の中の一画、清水公園とその南側が目的地。公園は微高地になる。南の畑の畔には古瓦の細片が残る。

喜田清水廃寺は椅鹿廃寺の立地とは異なり、広い平野の北辺を選地しており、伽藍は遠くからでも目立つであろう。三草川が加古川と合流する一帯が賀毛郡のなかでも最も条里地割が残る地域である。

トレンチによる確認調査であり、また、遺構の残存状況がわるく、伽藍跡や寺域は不明だが、版築や瓦溜め等の遺構が検出された。遺物は、瓦、螺髮（らほつ）、二彩（にさい）の火舍（かしゃ）香爐、綠釉（りょくゆう）陶器など寺院に伴う遺物が出土する。

寺院は8世紀中頃～後半に建立され、平安時代の11世紀頃まで存続したと推測されている。



瓦の系譜・親縁関係など

瓦は軒丸瓦7種、軒平瓦5種。創建瓦の単弁六葉軒丸瓦は椅鹿廃寺の単弁八葉軒丸瓦と近似し、他の一種の単弁六葉軒丸瓦は西条廃寺（加古川市）と同范（どうはん）とみなされることから、これら寺院の創建には加古川流域の氏族が関わったと推測されている（今里幾次「加古川市の古代寺院とその壇越」『播磨古瓦の研究』真陽社 1995年）。木材や水運の利害関係者がそれぞれの拠点に知識によるネットワークで寺院を建立したのであろう。

また、「重弁（じゅうべん）風の軒丸瓦は……花弁の周囲に線描の弁の輪郭をまわし、平たい凸状の間弁に珠文をおく特徴は、大阪府柏原市の鳥坂寺跡（高井田廃寺）のものに共通し…」との指摘がある（『小野市史』第一巻）。鳥坂寺も「知識寺院」と考えられており、河内の渡来系氏族と加古川流域の氏族との間のネットワークが考えられる（図録『河内六寺の輝き』柏原市立歴史資料館 2007年）。

上記『小野市史』では、喜田清水廃寺を既多寺の可能性がある、とも指摘されている。

喜田清水廃寺の近所に佐保神社があり、加東市埋蔵文化財事務所も遠くない。

#### 寺院の造立集団、穂積臣氏・穂積百足

喜田清水廃寺の西、加古川左岸には穂積という地名が残り、遺跡周辺は『播磨國風土記』の穂積里に比定される。穂積里の名称については

今、穂積と号（なづ）くるは、穂積臣等の族（やら）、此の村に居り。故（かれ）、穂積と号くとある。氏族名が里名になるほど穂積臣氏は有力氏族であり里長・郡司階層であろう。穂積臣氏の「氏寺・私寺」と言わなくてもおかしくないくらいである。

本家の穂積氏は寺院建造のノウハウを持っていました。『大安寺伽藍縁起并（ならびに）流記資財帳（るきしざいちょう）』によれば、皇極天皇元年（642）、倭国最大規模の寺院で九重塔を備えた百濟大寺の再建には、阿倍倉橋麻呂・穂積百足が造寺司に任命されている。河内国の河内郡穂積郷には穂積氏の「氏寺」とされる法通寺が残る。播磨の穂積臣氏は寺院造立に際して様々な情報や利便を得ることができ、喜田清水廃寺は穂積氏が主導した知識寺院であった可能性が考えられる。

阿倍氏の関連では、既多寺知識経に阿部連の名がみられる。このようにヤマト王権を構成する有力な氏が賀毛郡に勢力を有する状況は注目される。

むろん、山直や針間国造も知識のメンバーである。

### 広渡（こうど）廃寺（国史跡）

喜田清水廃寺から国道175号線を南へ、東条川を越え約8km、広渡廃寺跡が歴史公園に整備されている。古代寺院の伽藍跡が全面的に保存された例は全国的にも稀だ。有名な重源（ちょうげん）が創建した浄土寺の真西、約2kmになる。

浄土寺と広渡廃寺関連が深く、浄土寺文書に「薬師如来坐像は本（もと）廣渡寺の本尊」とある（毛利久「美術資料としての浄土寺縁起」『国史論集』赤松俊秀教授退官記念会編 1972年）。

史跡整備の調査が行われている。

- i) 『播磨広渡寺跡』小野市教育委員会・  
広渡寺廃寺跡発掘調査団 1980年
- ii) 『国史跡広渡廃寺跡 発掘調査報告書』  
小野市教育委員会 2005年

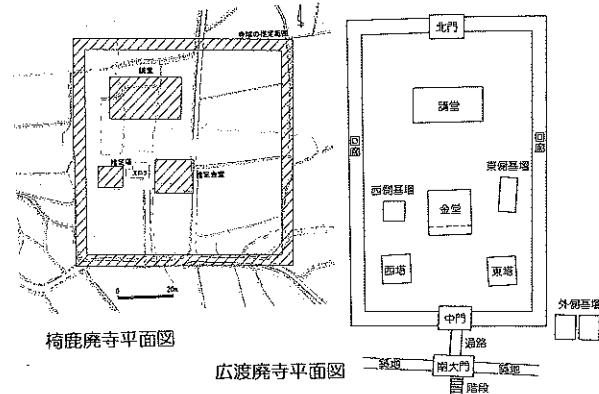
伽藍配置は東西二つの塔をもつ薬師寺式の範疇だが、回廊が講堂ではなく北門に取り付く。金堂、金堂脇の二つの基壇（経蔵と鐘堂か）、中門、南大門、僧坊（？）などが調査され、堂々たる寺院であることが確認された。

遺物には通例の瓦・土器等の他に鶴尾（しひ）、瓦塔（がとう）、博仏（せんぶつ）、螺髪（らほつ）、飾金具片、墨書き土器等が見られる。

広渡廃寺の創建・存続年代は、7世紀末～平安時代中期とされる。

### 瓦の系譜・親縁関係など

瓦は寺を建立した人物・集団のネットワークをう



かがう有力な資料になる。極めて輻輳しており、寺院を建立した知識集団が様々な関係で他の知識集団と結びついていたものと考えられる。

i. 創建瓦は重圈文縁（じゅうけんもんえん）単弁六葉蓮華文（たんべんろくようれんげもん）軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセット。重圈文縁単弁形式の軒丸瓦は、対岸の河合廃寺・新部大寺廃寺でも見られる。

ii. 次の段階の軒丸瓦Ⅱは、鋸齒文縁（きょしもんえん）の単弁六葉蓮華文。この軒丸瓦は、繁昌廃寺で紹介したように、太寺廃寺→広渡廃寺→繁昌廃寺となり、太寺（たいでら）廃寺の系譜になる。

iii. 軒丸瓦Ⅲ（鋸齒文縁九葉蓮華文）は、線描きによる重弁風で新部大寺廃寺（十一葉）と弁数は異なるが、ほぼ同様式（=新部大寺廃寺）。

iv. 軒丸瓦Ⅳ（鋸齒文縁複弁八葉蓮華文）は野口廃寺（加古川市）・小神廃寺（たつの市）に見られる様式で、その便化した様式が多田廃寺（姫路市）、さらに、美作・柏原廃寺からも出土する。

v. 河内につながるジグザグ縄叩きもみられる。

### 寺院の造立集団・知識リスト

広渡廃寺の北、東条川の流路は動いているようだが北岸に古瀬という地名が残り、周辺は『播磨國風土記』の起勢里（こせのさと）に比定されている。

巨勢部（こせべ）等、此の村に居りき。

仍（よ）りて里の名と為す

前述の穂積臣氏と同じで、巨勢部（許世部）氏が里長・郡領クラスの在地豪族であり、知識の主導者になった可能性がまず挙げられる。こちらの本家もヤマト王権の構成メンバーである。

起勢里奥江の、「播磨の国の田の村君（むらぎみ）、百八十（ももやそ）の村君」と記される「田の村君」は有力家父長層と考えられ、大野寺土塔（どう 堺市）の「知識瓦」のように知識の一端を担ったこと

が憶測される。

### 新部大寺（しんべおおでら）廃寺（小野市新部町）

広渡廃寺跡歴史公園から西へ加古川（新大河橋）を渡り、JR加古川線を越え、大寺集落の願正寺を目指す。JR河合西駅の西約300m。道路工事等により寺域の確認調査が行われている。

- i)『播磨大寺遺跡 I 昭和46年度発掘調査報告書』小野市教育委員会 1972年
- ii)『小野市史』第四巻 史料編 I 小野市史編纂専門委員会 1997年

新部大寺廃寺の寺域・伽藍配置は集落と重なり調査では解明できなかったが、現在も個人のお宅の入口に東塔の心礎（しんそ）が残り、動いていないことが確認された。講堂らしき基壇の一部、推定鍾堂跡、石敷遺構、瓦溜め等が調査されている。

かつて土壇が残っており、また、西塔の心礎が掘り出され近年まで残っていたことから、双塔伽藍をもつ薬師寺式伽藍配置が想定されている。

新部大寺廃寺は7世紀後半に創建され、奈良時代には広渡廃寺とともに整備が進められ、平安時代まで存続したようである。

### 瓦の系譜・親縁関係など

i. 創建瓦の素弁式軒丸瓦（重闇文縁単弁八葉蓮華文）は、北東約2kmに建立された河合廃寺出土例と類似する。  
＊河合廃寺 → 新部大寺廃寺

ii. 細弁式軒丸瓦（波状文縁単弁十一葉蓮華文）は、広渡廃寺と同様・同文。

iii. 法隆寺式の忍冬唐草文軒平瓦は、新部大寺廃寺 → 繁昌廃寺・吸谷廃寺 → 野口廃寺の系列。

菱田哲郎氏は法隆寺のものと酷似する軒平瓦について、「法隆寺と何らかの直接的な交渉を持っていた」とされ、山部連（やまべのむらじ）・山直との関連を想定されている（『賀茂郡の古代寺院』『加西市史』第一巻 本編1 2008年）。

iv. 平瓦凸面のジグザグ縄叩きについては、繁昌廃寺・広渡廃寺・石守廃寺、さらに、河内の渡来系氏族造立の知識寺院の瓦とつながる。

このように新部大寺廃寺の造立集団（知識集団）は加古川流域のみならず、山直・山部連と法隆寺、河内の渡来系氏族との知識・ネットワークを形成していたようである。

### 「大寺」について

新部大寺廃寺の所在する「大寺」については、郡家（ぐうけ）の周辺、あるいは郡と関連する寺院の呼称ではないかと注目されており、24ヶ所が集成されている（『地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』奈良文化財研究所 2005年 p233）。

明石郡の太寺（たいでら）廃寺も大寺の転訛ではとの指摘があり、近接して明石郡家を想定する説がある。太寺廃寺塔跡が残る高家寺（こうげい）も郡（コホリ）と関連するかもしれない。賀茂郡衙（くんか）跡は未確認だが、広渡廃寺周辺との説がある。

### 河合廃寺（小野市河合中町字薬師前）

新部大寺廃寺から北東へ約2km、河合運動広場に隣接。加古川右岸の沖積地に立地するが、東側は崖状になり、加古川の洪水で寺域が削られたようだ。薬師堂の背後がすこし高くなっている、金堂の基壇跡と推測され、礎石が3個残る。周辺は山林であったが、水田化する際に掘り下げられたものだ。

1953年、塔跡が調査され、田園の下に残されていた地下式心礎が確認された。基壇は一辺約12m（田岡香逸・高井悌三郎・藤澤一夫「播磨国河合廃寺—風土記の賀茂郡川合里に所在した寺院—」『史迹と美術』287 1958年）。

伽藍配置は、塔と推定金堂の位置から法隆寺式が想定されているが、未確認である。遺物は、瓦類、古式の鶴尾、塔の相輪（そうりん）の一部である平頭（へいとう）の断片、燈籠の火袋（かたい）の断片など。

建立時期は7世紀後半とされ、加古川流域で最も早い時期に建立された寺院になる。

### 瓦の系譜・親縁関係、山背（やましろ）秦氏

河合廃寺の創建軒丸瓦は、外縁の周縁に珠点や平行線（輻線）を交互にあしらう輻線珠文縁（ふくせんしゅもんえん）単弁八葉で、極めて特徴ある。

同様の文様が、殿原廃寺・中西廃寺で見られ、さらに、但馬の殿岡廃寺（香美町村岡）、立脇廃寺（朝来市）、三宅廃寺（豊岡市三宅）、丹波の和久寺（福知山市）でみられ、その系譜は山背の北白川廃寺、北野廃寺、広隆寺につながる。山背の古代寺院は言うまでもなく秦氏、そして山陰道に関連する。

後日、加古川流域に集中する、①双塔様式の伽藍、②ジグザグ縄叩き技法等と合わせ、紹介したい。